

福島こどものみらい映画祭基調

テーマ：映画と語る家族のカタチ、育つチカラ

映画の歴史が始まって一世紀あまり、多くの映画が、世界各地で暮らす子どもたちの身体の躍動を、心のときめきを、魂の震えを、フィルムの中に刻み込んできました。そして、映画に描かれた「子ども」というフィルターを通して、私たちは、自身の歩んできた道のりを振り返り、身のまわりの世界のあり方に思いをめぐらし、託すべき未来の姿について想像力を働かせてきました。今そこにある世界を見つめる子どもたちのまなざしは、まっすぐに私たちの目に飛び込んで来て、見慣れていたはずの世界を、日常に埋没していた世界をあらためて照らし出し、それはまるで私たちの発することばを、取るべきふるまいを、待っているかのようです。

「福島こどものみらい映画祭」2009 では、そのような映画を通して、子どもたちが育っていく社会環境について考えるための、さまざまなきっかけや見方、考え方を提出していきたいと考えています。まずは、スクリーンの中の子どもたちと一緒にあって、笑ったり、怒ったり、泣いたりしてみませんか。悩んだり、考え込んだり、恋をしたりしてみませんか。子ども時代のハラハラドキドキ感を共有し、思うがまま喜怒哀楽を表現することによって、私たちは、ひょっとしたら、実際に子どもたちの目に映っている世界とめぐりあうことができるかもしれません。子どもたちが抱く悲しみや苦しみ、憤りは、しばしば大人たちが作り上げている世界に原因を持っていたり、時には大人自身が直面する困難を反映したり、時にはそうした困難をより尖鋭化された形で表したりもします。それに出会うということは、まず何よりも、大人の世界を、子どもたちの視線からあらためて見つめ直すという試みでもあるはずです。

「福島こどものみらい映画祭」2009 は、このような考え方から「映画と語る家族のカタチ、育つチカラ」というテーマのもとに、廣木隆一監督『きみの友達』とそれに関わるシンポジウムを企画いたしました。映画という素材をめぐって、多くの皆さんが、多様な考え方、多様な経験を持ち寄って、集い、考え、話し合うことを通じて、未来への展望を開く糸口としよう、「福島こどものみらい映画祭実行委員会は心から呼びかけます。

家族のカタチ

20世紀、日本社会の大きな変動とともに、「家族のカタチ」も変容を続けてきました。20世紀を生きたすべての人々がそうであったように、あるいは、そうであったからこそ、日本社会の中の「家族のカタチ」も、さまざまな政治や法の制度、相次いだ戦争、経済や社会の急激な変化の波に翻弄されてきました。社会の変化は「家族のカタチ」に影響を与え、「家族のカタチ」の変容は私たちの生活様式の変質をもたらし、そして、それらが再び社会全体の変化へとつながっていきました。法のうえでは、伝統的「家」制度に基づく旧民法から日本国憲法とそれに基づく新しい民法への改正がおこなわれ、家族のメンバーの地位や役割が重要であった時代から、夫婦間の愛を中心とする平等な関係が強調されるようにもなりました。伝統的な大家族中心の社会から夫と妻、そ

の子から構成される核家族中心の社会へ変化することによって、一つの家族の構成員の数は減少の一途をたどりました。戦前においては都市部を中心としていた核家族化の流れは、戦後、急速に全国規模に拡大していき、昨今の少子化現象ともあいまって、従来の家族の果たしてきた役割や機能も変化を余儀なくされています。経済のうえでは、戦後の急速な経済発展のなかで農林水産業から第二次、第三次産業へと産業の構造が転換され、そのことによって、賃金労働者の急増、職場と住居の分離、性別による役割分業の強化などの現象が急速に進みました。さまざまな要素が「家族のカタチ」に影響を与え、そこに生きる私たち一人ひとりのライフスタイルや考え方に何らかのチカラを及ぼしているようにも見えます。家族をもつことで、私たちはどのように社会を生き、どのような問題に直面しているのでしょうか。

同時に、「家族のカタチ」の変容は家族の構成やそれぞれのライフサイクルの変化ばかりではなく、私たちの意識や価値観にも大きな影響をもたらしてきたようにも見えます。「プライバシー」や「マイホーム」といった価値観のもとで、戦後の家族は、冷蔵庫、洗濯機、掃除機といった「三種の神器」、カラーテレビ、クーラー、車といった3Cなどの、消費の舞台でもありました。1980年代以降、これら消費の舞台は、家族よりもさらに小さな単位、個人へと移っていきました。個室としてのこども部屋、一人に一台のテレビやテレビゲーム、いついかなる場所でも一人で音楽を聴くことのできるポータブル・オーディオ・プレーヤー、言うまでもなく、携帯電話やインターネット……。もはや、「家族のカタチ」に「スタンダード(標準)」と呼ぶことのできるものはないと言ってもよいかもしれません。恋愛や結婚、仕事のあり方、同時に、それらについての意識や考え方など、生き方の選択肢はきわめて多様化し、そのことによって、女と男の関係も、出産や子育ての方法も、もちろん、「家族のカタチ」も、それぞれ個別の価値観に基づいて、独自にしあわせの道を模索しているかのようです。

意識や価値観の多様化は、旧来の価値観から人々を解放し、新しいライフスタイルの可能性を育みつつあります。一方で、時には、それぞれの家族の孤立化は、これまでに培ってきた地域の経験を伝承したり、複数の家族の経験を共有したり、それらの経験を次の世代へと受け継いだりしていくことを、困難なものにする場合も生じます。今日、メディアでは毎日のように、家族をめぐるさまざまな現象、新しい出産、子育てのあり方、新しい家族関係が報道されています。時には、目を覆いたくなるような家族内の悲劇が報じられることもあります。こどもたちは、どのようにして自己をつくりあげていくのか、個人の利害を乗り越えて他者との関係を作ることができるのか、人と人との豊かなコミュニケーションの中に自分を置くことができるのか、その出発点は家族です。「世界で最も古く、最も新しい問題」である「家族」、こどもを「育てる」、こどもが「育つ」現場という観点から考えていきたいと思えます。

育つチカラ

「福島こどものみらい映画祭」2009の上映作品の一つ、山下敦弘監督『天然コケッコー』は、くらもちふさこの同名漫画を原作とし、田舎町の少女が転校生に寄せる淡い想いを描きながら、実は彼女がそれまでは知らなかった世界と出会い、それに立ち向かうための「チカラ」を身につけていく若い季節の一瞬を鮮やかに切り取ります。

ヴェラ・ベルモン監督の『ミーシャ ホロコーストと白い狼』は、第二次世界大戦を背景としながら、果てしなく広がる大自然の中で狼と旅する少女がみずから「生きるチカラ」を獲得していく過程を描きます。そして、ドキュメンタリー映画『里山っ子たち』では、木更津市の保育園で実践されている里山保育の光景が一年間にわたってフィルムの中におさめられ、子どもたちに内包されている「育つチカラ」がその輝きを増していくのを目の当たりにするはずです。掌にずしりと感じるおたまじゃくしの卵、風の運ぶ微妙に異なる草や土の匂い、生き物や山野草が奏でるリズムカルな音楽、それらと向かい合うことで、子どもたちは知らず知らずのうちに自分たちの「育つチカラ」を磨き上げていきます。喧嘩や争いを繰り返しながらも、五感を研ぎ澄まして「生きる」ということの意味について、改めて考えさせられます。

第三世界の映画を見ていると、子どもたちの育つ社会環境の厳しさに愕然とすることがあります。時にその生活環境は劣悪で、最低限の衣食住を満たすことさえままならない。しかし、その瞳はきらきらと輝いていて、「生きる」という一点において子どもたちは自ら「育とう」としている。私たちの社会において、「教育」ということばが「教え育てる」ということを意味するとき、子どもたちの中の「育つチカラ」はそれほど顧みられていないのかもしれませんが。「教育」が綿密に組み立てられたスケジュールのもとで進められるとするならば、「育つチカラ」は現実の人と人とのコミュニケーションや自然の中を歩くときの、さまざまな偶然、突発的な出来事との遭遇の中から育まれるのではないのでしょうか。本来子どもたちに備わっているはずの「育つチカラ」をどのように見出し、見守っていくことができるのか、私たちは果てなく考えていきたいと思っています。

経済不況、就職難、リストラ・・・若者たちが、いやすべての人たちが、時として、今すでにある社会に対して、何らかの閉塞感を抱くこともあるかもしれません。同時に、その閉塞感を打ち破ることができるのも、私たち自身が、実生活の中で育んできた、育みつつある、これから育もうとしている「育つチカラ」なのではないのでしょうか。子どもたちを見つめる映画の視線、カメラを見つめる子どもたちの視線、スクリーンを見つめる私たちの視線など、いくつもの視線が交錯するところに「家族のカタチ」の焦点を合わせると、そこに子どもたち自らが発する「育つチカラ」が見えてくるかもしれません。どうぞ私たちと一緒にそれを探してみませんか、一步一步、着実に。

福島こどものみらい映画祭実行委員会は皆さまに呼びかけます。子どもたちを描いた無数の映画、スクリーンから発せられる子どもたちのまなざしの光、言葉の力に対して、私たちは、今、どのような思いを抱き、どのような視線を返し、どのような未来を語るのでしょうか。どうぞ一緒に考えてみてください。そうしたことを願いつつ、今を生きている子どもたち、かつて子どもだった大人たち、世界に対する好奇心にあふれたすべての「こども」たちのために、そうした「こども」たちがそれぞれの人生経験を携えて、集い、語り、考える場として、「福島こどものみらい映画祭」2009を企画しました。

すべての「こども」たちの皆様のご来場を、心よりお待ちしております。